2021.5.25

No.224

編集・発行人　樋口みな子

E-mail
minginga@agate.plala.or.jp
URL http://www13.plala.or.jp/minginga/
郵便振替「銀河通信」
02740－7－56535
（郵送年間2,000円）

小さないのち輝く、野の花に励まされて

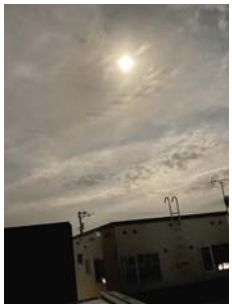
コロナ感染拡大が止まりません。みなさまはお元気ですか？北海道も5月16日から31日まで緊急事態宣言が出されました。友人と会う機会もほとんどありません。もっぱら、近くの公園歩きを楽しんでいます。

山の友人が誘ってくれて、深川の丸山公園の野の花を楽しみました。いつもの年より、カタクリの可憐さに心洗われました。アリがカタクリの種を遠くまで運んで見事な群落をつくります。開花までに7～8年かかると知ると、自然の営みの長大さに感動します。花言葉は「初恋」「寂しさに耐える」です。カタクリと一緒に淡いブルーのエゾエンゴサが群生。花言葉は「妖精たちの秘密の舞踏会」（2008年の倉本聰脚本のテレビドラマ「風のガーデン」より）

カタクリとエゾエンゴサクの群生とキタコブシ

キタコブシが咲き始め、ニリンソウやキバナノアマナも咲いていました。高台から見る暑寒別岳（右上左側写真）はまだ真っ白です。（4月23日）

自宅2階から見た「ピンクムーン」と呼ばれる4月の満月（右側の写真）がきれいでした。ネイティブインディアンの暦で4月に咲くピンク色の「フロックス」という花に由来するそうです（4月27日）



野の花に会いに野幌森林公園を3時間近く歩きました。ニリンソウは5月8日から1週間で群落になっていました。よく似たキクザキイチゲが所どころに交じっていました。オオバナノエンレイソウがひとりで咲いているのはなんだか寂しそうで、いつの間にか、二輪、三輪咲きを探していました。花言葉は「奥ゆかしい美しさ」。好きな花になりました。オオタチツボスミレの愛らしさも、小さな花なのに存在感がありました。林の中で咲いていたオオカメノキも美しい。小さないのちを輝かす野の花に励まされました。（5月15日）

ニリンソウ

オオバナノエンレイソウ

オオタチツボスミレ

オオカメノキ

歴史修正主義に毅然として対峙し、歴史の真実を社会に一層広く訴えていきたい 4月10日植村裁判終結報告会が開かれました

植村裁判終結報告会は4月10日午後、北海道自治労会館（札幌）で開かれました。旭川や室蘭からも含めて160人の参加がありました。報告会の前にドキュメンタリー映画「標的」（西嶋真司監督）の上映会がありました。「標的」は“捏造記事”を書いたとして激しいバッシングに晒された元新聞記者の植村さんが主人公。他のメディアも同じ様な記事を伝える中、何故彼だけがバッシングの標的になったのか？　民主主義の根幹を揺るがすジャーナリズムの危機に迫ります。

会場から、たくさんの感想が寄せられました。私はドキュメンタリーで当時高校生だった植村さんの娘さんの発言が印象に残りました。「SNSでの攻撃は卑劣で同じような苦しみを味わっている人のことも含めて示談にはしたくなかった」ときっぱりと言ったことに勇気づけられました。

櫻井よしこさんや西岡力さんらを訴えた札幌と東京での裁判は最高裁で敗訴が確定しました。

札幌弁護団共同代表・伊藤誠一さん

報告会では札幌弁護団共同代表の伊藤誠一さんが裁判を振り返りました。「勝利報告ができないことに非力を感じお詫びを申し上げたい。支援のみなさんの大きな量と高い質の活動には驚くばかり」と語り、裁判の成果として▼植村バッシングを緊急避避的に止めた▼金学順さんの名誉を守るたたかいであることも含め植村氏は自身の主張と姿勢を貫いた。元道新記者の喜多氏の誠実な証言は説得力があった。櫻井氏の尋問も大きな成果を上げた。言論の名による不法と無法を許さないたたかいは北海道における「法の支配」を貫く上で重要な経験となった、ことを挙げました。

さらに裁判官の判断に言及。伊藤弁護士は「札幌、東京合わせて12人の裁判官のうち、少なくとも2～3人の裁判官は、例えば国家権力による市民の権利侵害の回復を求める別の訴訟ではしっかりとした仕事をされた」と述べ、「裁判官も法の番人であると同時に人の子。自らの判断が社会の良識とかけ離れて市民社会から到底受け入れられないと考えた場合にはこういう結論は簡単には出さないのではないか。『慰安婦』問題では、いまだに社会の中で裁判官の誤った判断を許さないという強い力が、十分ではないということを意味しているという面があるのではないか」と分析した上で、「民主主義を傷つける事態には毅然と立ち向かっていく」と結びました。

今後の決意を語る植村隆さん

植村隆さんは「皆様と闘えたことの喜び」というお礼のメッセージを配布し、「本当に悔しい。裁判を起こす時には負けるなどとは思っていなかったのです。この裁判で勝った連中は、裁判の途中で自分の記事を訂正しているんですよ。なんで私が負けるんですか」と述べ、「しかし、裁判では、支援の市民による調査で、西岡氏や櫻井氏のフェイク情報を明らかにできた。ですから、これは勝利的敗訴なのです」と語りました。5年間つとめた韓国カトリック大学の教授職は、コロナ禍によって日韓往来の負担が増えたため、2月末に退職したとの報告もありました。「5年前に大学（神戸松蔭女子学院大）から断られた私が、こんどは私からお断りすることになりました」と述べました。週刊金曜日のほうは社長任期が2期目に入りました。「バッシングの被害にあっている人々の側に立ち、日本に言論の自由や民主主義を根付かせることが私のすべき仕事だと思う」とこれからの決意を語りました。

植村裁判を支える会のブログhttp://sasaerukai.blogspot.com/を参考にしてまとめました。撮影は石井一弘さん

判決を利用して住民の運動で止めてね・・裁判長からのメッセージ

大石光伸（東海第２原発運転差し止め訴訟原告団共同代表）

「主文　被告は東海第二発電所の原子炉を運転してはならない」。

3月18日、水戸地裁は首都北縁にある東海第二原発の運転差し止めを命じました。

第5層の防護レベルである避難計画及びこれを実行し得る体制が整えられているというにはほど遠い状態で、少なくとも30km圏内（PAZ・UPZ内）の原告らについて深層防護の第5の防護レベルに欠けるところがあり、人格権侵害の具体的危

険があると認められるというものです。

判決は「前提事実」として「発電用原子炉の運転は、人体に有害な物質を多量に発生させることが不可避であり、過酷事故が発生した場合に周辺住民の生命、身体に重大かつ深刻な被害を与える可能性を本質的に内在するものである」とし、福島第一原発事故の被害の深刻な事実を列記した上で、「そのようなリスク源を地域社会にもたらしているのは被告である」としています。

そして「最新の科学的知見によっても、本件発電所の運転期間内において、いついかなる自然災害がどのような規模で発生するかを確実に予測することはできない」がゆえに『深層防護』の考え方が重要で、「その第1から第5の防護レベルのいずれかが欠落しまたは不十分な場合は原発が安全であるということはできず、周辺住民の生命・身体が害される具体的危険性があるというべきである」としました。

1層から4層までで事故が起きる具体的危険についての原告住民からの指摘に対しては「そうだからと言って直ちに規制委員会の審査に看過しがたい過誤・欠落があるとまでは断ずることはできない」として規制委員会の審査を追認しながらも、なお第5層で住民を勝たせました。加えて「現行法による原子力防災対策をもってすれば第5の防護レベルの措置を担保できると言えるかについては疑問」とまで言い切りました。

勝利を喜ぶ市民運動の仲間たち

もし、裁判官があの福島第一原発事故という歴史事実と福島のみなさんの深刻な被害、広範な汚染を重く受け止めていなかったら、容易に原告住民の訴えを棄却していたと思います。

「30km圏内の原告との関係において」という限定された司法判断は、あくまで現行法制下で確実に司法判断を下すための手段だったと私たちは考えています。判決文は明らかに30km圏外そして首都圏で暮らす住民のことも念頭におかれています。

わたしたちはこの判決を、前田英子裁判長から「司法が現行法下で判断できるのはここまでなの、ごめんね。この判決を利用して、あとは住民の粘り強い運動で頑張って止めてね！」というメッセージとして受け止めています。

裁判は被告日本原電が翌日控訴したことで、原告側も一丸となって彼らを迎え撃つために控訴し、今後東京高裁での闘いとなりました。

東京高裁では国の息のかかった裁判官が一審判決を覆す可能性があります。日本原電は2022年秋には使用前検査で燃料装荷して地元同意がとれなくても再稼働をなしくずしに強行することも考えられます。国も電力会社も福井のようにあの手この手を使って必死に老朽原発再稼働の地元工作をして突破しようと画策してくると思います。

4月17日、裁判報告会・原告団総会では上記を確認し、東京高裁で弁護団と共に水戸地裁判決を「確定」させることに注力するとともに、この判決を生かして地元そして首都圏で議論を喚起し、関東一円から「再稼働反対」の声で包囲し、この首都の老朽原発を廃炉に追い込むことを確認したところです。

司法からもサイが投げられました。いよいよ本格的な闘いになります。全国の仲間のみなさんと共に闘う決意です。

ミャンマー弾圧許さない 札幌抗議デモに300人

桃井希生（札幌地域労組）

5月2日、札幌で、ミャンマー国軍による虐殺への抗議と、今年4月に新しく発足した国民統一政府（NUG）への支持を求める在道ミャンマー人主催のデモが行われた。

ミャンマーでは2月1日のクーデター以降、ミャンマー軍による市民への虐殺が続いている。市民、芸能人、ジャーナリストを含む3000人以上の逮捕者、700人以上の死者が出るなど、民主化運動は文字通り命がけの現場になっている。

日本人のわたしも、ミャンマーという国自体には馴染みがなかったものの、ニュースを見ながら、自分には何ができるのかと忸怩たる思いでいた。そんな中、大通公園で在道ミャンマー人主催のデモがあることを知り、参加した。

ミャンマー国軍への抗議デモ（５月２日、札幌大通公園　札幌地域労組提供）

当日は抗議活動の犠牲者への追悼の意を示す黒い服で来るよう指定があったため、デモの参加者はすぐに分かる。ミャンマー人はほとんどがわたしと同じ若い世代で、技能実習生として大手スーパーの総菜作り、水産加工、溶接、介護などあらゆる業種で働いているとのこと。現在、北海道では900人（うち札幌は500人）ほどのミャンマー人が生活している。

デモのコールは、英語、ミャンマー語、日本語で。この日は世界各地でミャンマー民主化を求めるデモが行われていたそうだ。「日本政府はテロリストミャンマー軍の残虐な行為をやめさせろ！」「ミャンマーの国民統一政府（NUG）をみとめろ！」「ミャンマーの民主化活動は勝利するぞ！」何度も繰り返すうちに、ミャンマー語のコールも覚えた。デモには日本人支援者も合わせておよそ300人が来ていた。

集会では、父親が軍に逮捕されたという人が泣き

ながら演説していた。年はわたしの一つ下で、技能実習生だ。ミャンマー語だったので言葉の内容は分からなかったが、彼/彼女らの置かれている状況の切実さを改めて感じた。「危険だから故郷に帰れない」ことの悲しみは想像を絶する(そのような人さえも国外に追い出そうとする入管法改悪にも断固反対する)。国外とはいえ、デモに参加する彼/彼女らやその家族の安全も危ない。

日本からのODA(政府開発援助)がミャンマー軍の資金源になっているなど、日本は現在のミャンマーの状況に大いに関係している。それ以前に、目の前の暴力を見逃すわけにはいかない。わたしたちも声を上げる責任があるはずだ。今回のデモはその始まりだと思う。ミャンマー市民が安全な社会を勝ち取る日が来るまで、わたしも出来ることをしたい。

ビルマ～大東亜共栄圏の亡霊

北岡和義（ジャーナリスト）

解放の志士育てた南機関

45年前、初めて訪れたビルマはネ・ウィンという軍人の独裁国家だった。

独裁政権はジャーナリストを嫌う。デザイナーのダミーの名刺を作って観光客を装った。見つかったらどうなるか分からないぜ、と友人らに脅された。アジア経済研究所にビルマの専門家がいて、事前にブリーフィングを受けた。

独りタイのバンコックから当時の首都ラングーン(現ヤンゴン)へ飛んだ。在ビルマ日本大使館員や商社の現地駐在員の連中と会い、現地の経済事情など詳しく聴いた。

何しろ街の中心街がスラム化し、夜は裸電球がポツンとついているだけ。大きなビルは英領時代、イギリス人が建てたものだろう。ペンキの塗り替えさえ出来ないほど疲弊していた。

闇経済が正規の経済よりはるかに強力で物資は国境のジャングルを人間が担いでビルマに持ち込んでいた。公設の市場へ行ってもほとんど買うものが無いのに郊外の闇マーケットへ行けばなんでも売っていた。

ネ・ウィンを育てたのは日本軍人である。ぼくが生まれた1941年、鈴木敬司陸軍大佐を機関長とする特務機関、南機関がバンコックで設立され、英領からのビルマ解放をめざした。ビルマ人の若い独立の志士ら30人を集め、海南島で軍事訓練したという。

彼らはラングーンをめざした。途中、参戦する若者がどんどん増え解放軍は膨れ上がった。彼らはついに首都(当時)ラングーンから英軍を追い出した。

しかし日本軍はビルマ人の独立を認めず、ビルマ独立の志士らが寝返って日本軍へ反乱するという劇的な事態を迎える。この時のビルマ解放の指導者がアウン・サン(日本軍人は「オン・サン」と呼んでいた)だった。

日本として取るべき態度

現在、自宅軟禁中のアウン・サン・スー・チーはオン・サンの長女である。オン・サンは戦後、暗殺された。今でも「ビルマ独立の父」と慕われ、ラングーンの中央公園には軍服姿のオン・サンの銅像が立っている。

この2月、国家特別顧問のスー・チーが身柄を拘束され、自宅軟禁された背景にはこうした現代史の事情が横たわっている。

刻々報道されている情報によると民主化を叫びスー・チーの釈放を求めるデモ隊に治安軍が発砲、3月末現在、521人の犠牲者が報道されている。

ミャンマー(1989年国名変更)と前述したような親密な歴史を持つ日本の政府は、なんとしてもスー・チー救出へ動く責任と義務があるはずだ。

ミャンマーは敬虔な仏教国でありながら複雑な国内事情を抱えている。人口5142万人だが、ビルマ族が68%を占め、後はカレン、カチン、モン、シャンなど少数民族が135もあると言われている。北方のジャングルには数は少ないが首輪を何重にも重ねつけ飾っている首長族がいる。真偽のほどは不明だが、人食い人種もいると言う者さえいる。

しかもビルマ・タイ・ラオス国境のジャングル地帯は〝ゴールデン・トライアングル〟と言って麻薬の栽培地。南方ではロヒンジャと呼ばれるイスラム系難民が隣国に押し寄せている。

ぼくは2005年正月、ミャンマーと国名を変えたビルマを再訪した。LAの知人で食品貿易で成功したビジネスマンが東京商科大学(現一橋大学)の学生の時、学徒動員で招集され、ビルマで英軍の捕虜となる経験を持っていた。彼とのセンチメンタル・ジャーニーだった。

さすがラングーンはかなり整備され新しいビルも建てられ発展していた。日本企業が400社進出している。と言っても一歩郊外へでれば子供は裸足で、ぼくら外国人が珍しいのだろう。ぞろぞろ付いてきた。

それ以降ミャンマーの民主化は進んだ、と思っていた。そこへ今回の事態である。

急激な民主化に対する軍人の危機感からスー・チーの拘束となったのか。一時、インターネットが遮断され、日々、死者が増え、治安部隊による残虐な行為が報道されている。部隊に歯向かう連中を生きたまま火中へ投げ込むなどミャンマーは地獄化している。

政治的にはスー・チー率いるNLDが圧倒的な支持を得ているが、クーデタを起こしたのは武器を独占する軍人。ぼくには彼らが「大東亜共栄圏の亡霊」に見えるのだが・・・。(2021年4月5日掲載『文化通信』アポトーシスの夢から転載)

東海第２原発の運転差し止めの判決に勇気づけられました。その報告を大石光伸さんに寄稿していただきました。
ミャンマー国軍による弾圧に怒りの声が世界中から殺到しています。札幌でも行われた抗議デモの様子を桃井希生さんに、クーデターで自由が奪われているミャンマーについて『文化通信』に書いたジャーナリストの北岡和義さんの文章を転載しました。是非読んでください。

本 BooKs

原発避難者たちの苦しみは終わらない

いないことにされる私たち
福島第一原発事故１０年目の「言ってはいけない真実」

青木美希著 朝日新聞出版 1,650円

著者の青木美希さんは現役の記者です。『地図から消される街』で原発事故の復興が被災者を置き去りに進められていることを明らかにしました。本書でも、国の政策を追及し続けています。第1章「消される避難者」の項では原発事故で夫を残し、妻と子で大阪市に避難した家族の現状が語られます。森松明希子さんは区ごとの避難者一覧を手にして驚きます。一家の名前が入っていないのです。森松さんだけでなくたくさんの家族の名前もなく、国に直接訴えるのです。大量の集計が数百人規模で漏れていたのです。賠償や立場の違いによっての分断は水俣病でも起こりました。森松さんはジュネーブの国連人権理事会でも訴えます。人権理事会は避難民の権利の保護や、自主的な避難者への住宅支援の継続を勧告しています。

森松さんは1年もかかって避難者名簿に載りました。原発被害がなかったことにしていく巧妙な政策に怒りが沸きました。福島第一原発事故から10年、避難者の数を政府は4万人と発表しています。ところが、実際には7万人いると指摘しています。市町村の名簿から3万人が消えていたのです。

第2章は「少年は死を選んだ」です。

南相馬市の庄司範英（のりひで）さんは看護師の妻を残して、子ども4人と新潟県長岡市に避難しました。子煩悩で料理が上手な庄司さんは懸命に生きて来たのです。ところが政府と福島県が原発事故の避難先住宅の提供を2017年3月末で打ち切ったため、家賃月9万円が自己負担となります。避難指示区域外のため多額の賠償金はない。子どもを守るために庄司さんだけが福島県南相馬市の実家に戻って仕事を探すことを決めるのです。14歳の長男黎央(れお)さんはお父さんが大好きで、離れ離れになるのを寂しがります。庄司さんは2017年6月12日から清掃会社で除染の仕事が決まっていました。いつになく「お父さん帰っちゃうの」「いつ帰ってくるの」「まだわかんない」。そんな会話をして南相馬に戻った庄司さん出勤の朝に黎央さんは自宅で自死します。涙が止まりませんでした。庄司さんは息子を死なせたと自分を責め続けました。

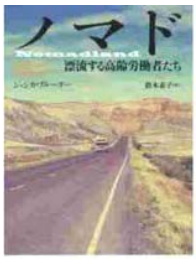
青木さんは国の責任を厳しく問います。避難者をなかったことにする、政府と福島県の関係者に何度も会い、訴えました。庄司さんは息子の死がきっかけになり、同居を始めたばかりの妻ともうまくいかなくなり離婚。うつ病などを発症し、死の誘惑に負けそうになります。

青木さんの粘り強い訴えに行政は動いたのです。黎央さんの死は震災関連自殺と認められたのです。

青木さんは庄司さんを支援団体につなげたいと奔走します。南相馬市内で「メンタルクリニックなごみ」の精神科医、蟻塚亮二さんや、「相馬広域ケアセンターなごみ」のセンター長の看護師米倉一磨さんと連絡をとり、庄司さんの支援につなげました。原発事故で苦しむ人々の心に寄り添う青木さんの温かさにも涙が止まりませんでした。

庄司さんの発言「息子が生きるも死ぬも、大臣さんに言わせれば自己責任なのか」に耳を傾けてほしいです。

福島原発事故から10年。再就職もままならず苦難の暮らしを強いられてる人々に心を寄せなくてはと思いました。是非読んでいただきたい本です。



自由だけではない老後なき時代の現実

ノマド　漂流する高齢労働者たち

ジェシカ・ブルーダ著　鈴木素子訳　春秋社2,640円

この本は3月に観た映画「ノマドランド」からもっと深くアメリカ社会を知りたく読みました。そこには大草原を旅する自由な生き方とは別の一面も見えてきました。

若いジャーナリストが自ら車上生活を体験し3年にわたって数百人に取材、リーマンショック後の新しい高齢貧困層密着ルポ。日本の明日を予見するノンフィクションです。

人々が路上に出る経緯はさまざまです。特に、金融危機で財産を失ったり、中流階級の人々が、家を差し押さえられ路上に出るケースが目立ちます。しかも大半はリタイア組の高齢者。キャンピングカーに住みながら、中短期契約の仕事で食いつなぎます。特にアマゾン倉庫での肉体労働はかなり酷く、現場には痛みを紛らわすための鎮痛剤を常備し、何かあった際に運びこまれる救急車が待ち構えてさえいる。年金もままならない中でリタイヤなんて言葉はとっくに無くて、今日を生きるためには労働しなくてはならない。アマゾンは派遣社員も何千人と採用しているが、配送量が劇的に増える繁忙期の3～4ヵ月続くクリスマスセールの間は、ノマドを追加投入しています。彼らは荷物の出し入れで、1日に10キロ以上も移動するというのですから過酷です。リーマンショック後の新しい高齢者層を使うグローバル企業の舞台裏と、労働力の使い捨てが常態化する現代社会浮かび上がります。アメリカで貧困に喘ぐかつての中流階級は、数百万人にのぼるとも言われている。高所得者層と低所得者層の格差はますます広がり、アメリカは事実上カースト制になったと著者は終章で述べています。ノマドを登場人物にすることで、本書はアメリカ内の格差拡大に警告を発しています。

本書の主人公でもあるリンダの言葉を添えます。明るく愉快な車上生活者である彼女の夢は、自然エネルギーやリサイクル資材を生かした住宅アースシップを建てることだ。「いまは無事生き延びてるだけじゃなく、目標に向かって生きてるわ！だれだってそうでしょう。歳をとったからって、その日その日をなんとか生き延びるだけじゃつまらない。目標が必要よ」

大自然がノマドに希望を照らす
『ノマドランド』

樋口 みな子

札幌映画サークル会報
シネアスト
2021年5月
号掲載

『スリー・ビルボード』(2017)でアカデミー賞主演女優賞を受賞したフランシス・マクドーマンドが主演と制作を務めました。その圧巻の演技が今も忘れがたく、『ノマドランド』を鑑賞しました。北京出身のクロエ・ジャオ監督が5カ月かけて7つの州で撮影しました。

原作はジェシカ・ブルーダー著の「ノマド　漂流する高齢労働者たち」です。著者は3年間、キャンピングカーで2万4000キロの旅をし数百人のノマドを取材。老後なき時代の現実を書き上げたノンフィクションです。アメリカの現実が、日本の現実になる日がくるかもと思ったら、2019年にNHK「クローズアップ現代」で「車上生活　社会の片隅で・・」として放映されています。「ノマド」とは遊牧民を意味し、「現代のノマド」は家を持たず車上生活をしながら過酷な労働現場を渡り歩く人々のことです。主演のマクドーマンドが原作にほれ込み、映画化が実現しました。

2008年に始まるリーマンショックの金融危機による石膏採掘企業の経営破たんで、米ネバダ州の工場が街ごと閉鎖され、住民は退去を迫られました。ファーン(マクドーマンド)の亡き夫は工場の社員でした。この街で代用教員だったファーンは、仕事と住居を失い、亡き夫の思い出の品々と生活用品をおんぼろのキャンピングカーに積み込み、街を出ます。　教え子の少女に「ホームレスになるの？」と聞かれ「ハウスレスよ」と誇りを持って答えるのです。ファーンのキャラクターは、マクドーマンド自身の生き方や考え方を投影して作り上げられたそうです。登場するのは彼女に好意を寄せる元ノマド以外はすべて実際にノマドとして暮らしている人々で、まるでノンフィクションのようでした。

ファーンが最初に向かったのはクリスマス商戦で多数のノマドを季節労働者として雇っているアマゾンの巨大な倉庫でした。ノマドの仕事は商品の仕分け作業です。アマゾンは車の駐車スペースを用意して働きやすい環境を作っており、車上生活者が集中してかなりの労働力を得ているのです。しかし、商品を探して詰めるだけの単調な作業を、立ちっぱなしで何時間も続ける過重労働です。映画では仕事内容には触れていません。本人として登場したリンダ・メイは、原作の中でアマゾンの労働状況についてこう語っています。「私は大手オンラインショップの巨大倉庫で働いています。扱っている商品はすべて、どこか外国で労働者が食事もトイレ休憩も与えられず、一日14～16時間働かされているような国でつくられたもの。2万8千坪の広大なこの倉庫に詰め込まれ商品は、ひと月も持たないようなものばかり。この会社にはそんな倉庫が何百もあります」とフェイスブックの自身の投稿を引用し、著者に「アマゾンは消費者を抱き込んで、クレジットカードを使わせている。支払いのために、したくもない仕事を続けさせているのよ」と怒っています。リンダは過重労働で怪我を経験しています。誰もが一度は利用していると思うアマゾン。私はあるトラブルから、アマゾンの利用はまったくしていません。

ファーンは仕事で知り合ったリンダから誘われ、車で生活するための知恵を集めたサイトの運営者であるボブ・ウェルズ主催の集会で、多くのノマド生活者と出会い、ひとりで生きてゆくためのスキルを学ぶことになります。ボブはノマドのカリスマ的存在です。ファーンは行く先々でノマドに出会い、所有や定住から解放された生き方に共感します。

ファーンは、ノマドたちとさまざまな地で交流し、荒野や、岩山、森の中へと分け入りました。彼らと一緒に旅しているような臨場感も味わえました。ファーンの心の変化は大自然の中で起きます。荒野の中、岩山の森の中、星空の下、ハリーケーンの中で、自由に生きるすばらしさを知ります。ルドヴィコ・エイナウディが弾く美しいピアノが基調として全編に流れ、ファーンを励ますのです。ノマドたちはこの生活の良さは「さよならがないこと。またどこかで会おう」と言って別れることだと言います。アメリカの広大な大地を旅できる自由を持つ反面、車が故障して修理費が払えなければおしまい。病気や怪我をしたらおしまい。労働は過酷なうえに低賃金と、良いことばかりではありません。それでもアメリカ西部の雄大な自然に圧倒されました。特に広大な砂漠の夕焼けに、こんな大自然に抱かれながら死を迎えるのも悪くはないなと思いました。

あるシーンでボブ・ウェルズは、「ノマドは団結することでしか自分たちを守れないのだ」と語り、「経済は常に変化している」「私のねらいは救命ボートを手に入れて、できるだけ多くの人々を乗せることなんだ」。ボブの言葉とともにノマドたちの家(キャンピングカー)が映し出されます。

季節労働にともなう出会いと別れが本作を支える背骨のような役割を果たしているのです。だからこそ、劇中でファーンが育む友情はいつまでもは続かない。それは、仕事のように季節とともに移ろうのだから。ノマドとして生きる彼らは団結・協力し合う一方、一人ひとりが個別の存在であり、彼らなりの理由と経験があります。

実生活を投影したファーンやノマドの生き方は、持続可能な社会の希望を示唆します。大自然と共にありたいとするノマドの開拓者精神を象徴するような、雄大で荒涼とした風景描写に心が洗われま

した。あるノマドの「開拓者の生き方、これはアメリカの伝統だ」というせりふが腑に落ちました。

その一方で、老いても死ぬまで働き続けなければならない貧困と格差が拡大する資本主義のあり方はとても許せません。

ノマドにさえなれない人々はどうなるのでしょうか？「真に豊かで人間らしい生き方とはと何か」という問いかけが心に響きました。リンダは風と太陽で電気を賄うアースシップというサステイナブル住宅を建てたいと語っていました。その夢の行方が気になっています。

エンドロールでアマゾンが撮影協力をしていることを知り驚きました。格差社会に痛烈な批判を続ける『わたしは、ダニエル・ブレイク』(2016)や『家族を想うとき』(2019)のケン・ローチ監督だったら、どんな描き方をしたでしょうか？

©2020 20th Century Studios. All rights reserved.

苦難を乗り越えて何度でもたちあがる

ミナリ

リー・アイザック・チョン監督・脚本

監督は韓国系アメリカ人。自身の子どもの頃の体験をもとに脚本も書きました。

1980年代のアメリカ・アーカンソー州。農業で成功することを夢見る韓国系移民のジョイコブ（スティーブン・ユァン）は妻のモニカ（ハン・イェリ）と二人の子どもと越してきます。荒れた土地と、古いトレーラーハウスを前に不安を隠せないモニカ。しっかり者の長女アンと心臓に病を抱えながらも好奇心旺盛な弟のデビッドは、新天地に希望を見出していきます。まもなく、毒舌で破天荒な祖母も加わり、デビッドと一風変わった絆を結ぶようになります。

少年のように夢に向かって突き進むジョイコブは、モニカに相談もせずに決めるので喧嘩が絶えません。夫婦でアルバイトで暮らしを支えながら、未知の場所に根を下ろそうとする家族の物語を生き生きと描きます。

韓国から来た子どもたちの祖母スンジャ（ユン・ヨジョン）は茶目っ気たっぷり。飾らない性格です。花札に子どもたちを誘い興奮すると乱暴な言葉も飛び出します。いたずらっ子のデビッドにコップにおしっこを入れられたりしても、面白がります。ひどいいたずらを祖母にしたことで、二人の間に不思議な絆が生まれるのです。風変わりな祖母だけど、生き抜く知恵をたくさん持っているのです。両親は危ないからと「近づかないで」と禁止されている川に祖母が連れていきます。祖母が蒔いた韓国から持ってきたミナリ（セリ）の種が元気に育っていました。蛇に出会ったとき、祖母は「脅したらダメ。見えているのは安全なのよ」と言います。私の祖父母は淡路島から北海道に来た開拓農民です。私は夏休みのたびに日高ののびやかな景色が大好きで遊びに行きました。畑でも家の近くでも蛇をよく見ました。祖父は「蛇に石を投げたりしてはダメだ、バチが当たるぞ」と言ったことを思い出しました。祖母がデビットに「ワンダフルミナリ」を歌ってあげて寝かしつけるシーンも印象的でした。

畑の水が枯れて、作物が育たなかったり、祖母が病気で倒れたりとさまざまな苦難が続きます。試行錯誤を繰り返し、ようやく、お店に出荷できるまできたとき、奈落の底に落とされるような事件が起きます。モニカのとっさの行動に、私は混乱しながら、涙を止めることができませんでした。心を鷲掴みにされました。デビットが、祖母に向かって猛烈な勢いで走るシーンも忘れられません。せりふがないのに、感情が揺さぶられるのは久しぶりでした。

まさかと思うようなストーリー展開とヨジョンの見事な演技に圧倒されました。

タイトルの"ミナリ"は韓国語で、セリを意味し、たくましく地に根を張り2度目の旬が最もおいしいと言われていることから子ども世代の幸せのために、親の世代が懸命に生きるという意味が込められているそうです。家族一人一人の感情がとても丁寧に描かれて、ドラマチックで、心を捉えて離さない魅力がつまった作品です。

私は3月に札幌駅に隣接するシネマフロンティアで観ましたが、ユン・ヨジョンの演技に客席から笑いがもれました。ユン・ヨジョンは映画「ミナリ」で韓国俳優として初めてアカデミー賞助演女優賞を受賞。「映画界には競争というのはありません。今日は私が皆さんより運が良かったので受賞することができたのです」と謙虚なスピーチが良かったです。

仲間と家を建てる希望の物語

サンドラの小さな家

フィリダ・ロイド監督

サンドラ役のクレア・ダンはシングルマザーの親友から聞いた「アパートを追い出されて行き場がなくなる」という話をもとに、脚本を執筆しました。

アイルランド・ダブリンを舞台に、夫の暴力に傷つき、住む場所をなくした母娘が貧困にあえぎながら自ら小さな家を建てようとするさまを、様々な社会問題を交えながら描き出す。シングルマザーのサンドラは、ふたりの幼い子どもたちとともに、夫のもとから逃げ出す。しかし、公営住宅は希望者が多いために入居できず、ホテルでの仮住まいの生活から抜け出せない。ある日、サンドラは小さな家を自分で建てるというアイデアを思いつく。インターネットでセルフビルドの設計図を見つけ、サンドラを清掃人として雇っていたペギー、建設業者エイドに声をかけ、移民や不法占拠者、ダウン症の青年などが、建設に加わります。アイルランドでは「メハル」（助けあい）の精神が伝統です。サンドラと仲間たちが力を合わせて家が出来上がっていくシーンがワクワクして楽しい。希望を照らしだし秀逸。脚本・主演したクレア・ダンは「一人で抱え込んでしまいがちだけど失望から助けを求める道のりは、人生で大事なレッスン。人と共に何かを達成していくこと、助けることによって得られるものがそれぞれにある」と語っています。

サンドラは親権を巡って裁判で闘い親権を勝ち取ります。希望を捨てないサンドラの笑顔がいつまでも輝いてほしい。コロナ禍で、孤独を抱えて苦しんでいる人々が多いなかで、誰かに声をかけることの大切さが心にしみました。

沖縄戦が問う人としての生き方

生きろ　島田叡ー戦中最後の沖縄県知事

佐古忠彦監督

日本軍が住民を巻き込んで県民の4人に1人が亡くなった沖縄戦。地上戦が始まる2ヵ月前に、島田叡（あきら）は大阪府の内政部長から沖縄県知事とし赴任します。

「俺は死にとうないから誰かが行って死んでくれとはよう言わん」と、家族に反対されながら、死を覚悟して着任。

知事着任と同時に、島田は大規模な疎開を促進します。また食料不足解消のために台湾に出向き、大量のコメを調達したのです。

本土の人であるにも関わらず、沖縄県職員の慰霊塔「島守の塔」に名が刻まれている島田叡とはどのような人物であったのか？資料は数枚の写真ばかりで、島田氏本人の音声や映像は無い。

佐古監督は、島田を知る人々への取材や、部下が残した手記、新聞記事などから島田の言葉を拾い出していく。本人の断片的な言葉を再構築する事で人物像を浮かび上がらせるという新しい手法の試みによるドキュメンタリー。

軍司令部の牛島満は軍民一体の総力戦を命じました。三上智恵監督の「沖縄スパイ戦史」でも描かれていましたが10代の少年まで戦闘員として組み込まれました。島田は首里の指令部壕に米軍が迫ったとき、「ここで戦闘を終わらせるべきだ」と進言したという記録が残っていました。「軍と行動を共にするな！生きろ」と言い続けた島田叡。その言葉が生き残った証言者によって語られます。島田の声はないのに私の心に研するようでした。軍の理不尽な要求に抵抗し、住民の命を守ろうと力を尽くした知事がいたこと。葛藤しながら、それでも住民と共に在ろうとした姿を忘れてはならないと思います。

「森友・加計」、桜を見る会の問題では首相がウソ答弁や官僚は忖度して文書の改ざんや隠ぺいを繰り返しました。政治の劣化と歪みが、コロナ対応やオリンピック開催問題に通底しています。国のリーダーはどこを向いているのか？歴史は「いま」に問いかけているように思いました。

語りを担当した佐々木蔵之介さんのコメント「知事として、そしてひとりの人間として、力と心を尽くして命をつなぐことを説いた島田叡の言葉に震えました」

「幸せの国」が問う本当の幸せ

ブータン　山の教室

パオ・チョニン・ドルジ監督

教師の仕事が嫌いで、オートラリアで歌手になりたいと夢見ているウゲン（シェラップ・ドルジ）は祖母とティンプーで暮らしています。幸せの国、ブータンと言われ続けてきましたが、若者はそう思ってはいません。2000年ごろからインターネットの普及で、若者の意識が変わったことを映画の導入部でさりげなく語られています。

ある日、秘境で人が住むのも行くのも厳しい、標高4800mのルナナ（村民56人）への赴任を命じられます。バスを降りると厳しい山歩きが続き、8日目にルナナに着きました。7000mを超える山々がそびえたつ美しい村ですが、自然は厳しい。黒板もノートもないのに「勉強したい」と目を輝かせる子どもたちが素敵。特に学級委員の村民少女ベム・ザムが利発で愛らしい。「先生、授業は8時半からです。今、9時です」とウゲンを起こしにきて授業が始まります。子どもたちは「先生になりたい。未来に触れることができる人だから」と答えます。村人の親切さに、デモシカ先生が変わっていきます。村民によって黒板が設置され、ウゲンは子どもたちにノート代わりの紙を渡します。学ぶ楽しさを体現する子どもたちの姿が美しい。

村に暮らす人たちにとって、ヤクは大切な存在です。電気も通っていない昔ながらの生活を送る中で、ヤクの糞が燃料になることを知り、ブータンの文化や伝統の素晴らしさに気づきます。歌姫セデュの「ヤクに捧げる歌」が山にこだまします。「私はずっとルナナにいるわ」とウゲンに言います。ウゲンが本当の豊かさとは何かに気づきブータンの伝統を見直そうとする心の変化にブータンの未来が見えるような気がしました。ルルナの風景と素朴な人々と少女のキラキラした瞳が心にいつまでも残りました。

内容はまったく違うのになぜか、ずっと昔に観た中国映画「初恋のきた道」を思い出しました。

メンタルヘルス市民大学を受講しました

3月25日から2泊で調布市にある、NPO法人クッキングハウスのメンタルヘルスを共に学ぶ市民講座を受講しました。

市民講座には心の病気を持った人だけでなく一般市民も参加。クッキングハウスの代表、松浦幸子さん（写真）は「がんばり過ぎないこと。ぼちぼちということが大事。弱さは力。弱さを隠さないで出していく。今できることをやってみる」と語りかけました。増野肇先生の心を解放していく方法を考える「サイコドラマ」も面白かったです。2月にフィンランド映画「世界で一番しあわせな食堂」を観てクッキングハウスみたいだなと思いその話を書きたかったのです。遠くから会員として応援しているのですが、どんな人も受け入れてくれる温かさが大好きです。紙面が無くなりました。次号にしますね。

購読料と寄付をありがとうございます
（敬称略））3.23～5.6

後藤言行　亀田法子　阿部一子　伊藤功　猫の事務所
高橋儁　片山篤子　沼崎勝洋　仲俣善雄　蓬田三枝子
匿名　菅原三栄子　中村秀子　佐々木睦子　合田美津子
鈴木ゆかり　土門完治　パンフレット3冊　高橋儁　切手
合計 55,000円と切手は印刷と送料に使わせていただきます。
Webに切り替える方はお知らせ下さい。郵便振替「銀河通信」
02740-7-56535 にお願いします。

223号訂正
3p右中段　婦人の友3月号から→婦人之友